

ふるさとが育んでくれた平和への思い

ソプラノ歌手 下垣 真希 (下呂市出身)



振袖をリメイクした着物ドレス

教えてくれました。ドイツの環境万博から、2005年の愛・地球博にパトナタッチする閉幕式で、先人たちのすばらしい感性を発信できたことは大きな喜びです。

翌年、ドイツ万博で歌った曲を残すため、初めてのCD「じゃぼねすく」を制作。このCDは、日本の歌の多様性とすばらしさを実感させてくれただけでなく、クラシックが中心だったコンサート活動を、大きく転換させるきっかけとなりました。

私は冷戦時代からベルリンの壁が崩壊する歴史的激動期に、8年半にわたり、旧西ドイツに暮らしました。現地のラジオ局でDJもしていましたので、報道の立場からも、戦争がいかに人々を苦しめ続けるかを見つめ、また平和的な統一の立役者となったドイツの音楽家たちからは、美しい音楽を奏でるだけでなく、愛や平等、平和や希望といった人類普遍的な価値観を伝える大切さを学ばせてもらったのです。しかし、平和の音楽活動を始める原動力となったのは、CD「じゃぼねすく」に収録した「長崎の鐘」との出会いでした。

下垣の実家には、「平和を」という書がかかっていました。長崎の鐘の原作者、永井隆博士が、瀕死の床であおむけ

になり、渾身の力を込めて書いた命のメッセージです。愛する妻を原爆に奪われ、幼い子供を残して死にゆく病床で「人を許し、自分のことのように愛し、平和な世界を」と書き記し続けた、祈りの長崎の象徴。「平和を」は、博士のお宅に、医学生だった父の弟が下宿していたご縁でいただいたものでした。

昭和20年8月9日、長崎に原爆が投下されました。長崎医大で学んでいたほとんどの学生が即死した中、私の叔父は奇跡的に生き残り、ふるさとの島根県まで戻ったのです。背中が焼け顔は膨れ上がり、変わり果てた姿で自宅の玄関先に倒れていた兄を看病したのは、当時14歳の叔母。兄を一週間見つけた彼女が、私の「長崎の鐘」を聞き、戦後50年以上沈黙してきた、叔父の中で放射能に汚染された水を飲み、体内も被曝した叔父は、とんとんふさがっていく口のわずかな隙間に、濡れた糸を垂らして、最後まで必死に生きようと努力したといえます。

17という若さで逝った叔父の死を聞いた年、アメリカの同時多発テロが起きました。二度と戦争を繰り返してはならない。以来10年間、戦争の歴史と犠牲者のことを忘れず、平和を守ろうとする切なる願いを、一人でも多くの人に伝えるために、命と平和の尊さを伝えるコンサートを継続しています。

その集大成とも言えるコンサートを、



「長崎の鐘」の原作者・永井隆筆

10月23日(日)午後1時45分から、東京築地の浜離宮朝日ホールで開催することになりました。最新CD「平和を」に収録した「ふるさと」「長崎の鐘」「アメイジング・グレイス」「千の風になつて」などのほかに、「踊り明かそう」「歌のつばき」といった世界の名歌、ピアノの「革命」やヴァイオリンの「シンドラーのリスト」、愉快な一人オペラなどを、語りとともに聞いていただく音楽物語で、平和への祈りと、東日本大震災で沈みがちな心に、希望と元気を届ける内容になっています。

豊かな自然の中に暮らす人々の優しさ、調和と慈愛に満ちた心は、日本人の内に脈々と宿っていることを、被災地の皆様から教えてもらいました。これからも美しい日本の復興を願い、平和な世界に生きる喜びと感謝の気持ちを、心を込めて歌ってまいります。いつの日にかふるさと、岐阜の皆さまのお耳にかかれる機会を祈りつつ。

(コンサートなどのお問合せ)

クレッシェント企画 052-9338-7011

下垣 真希

愛知県芸術大学及びドイツケルン国立音楽大学卒
ドイツ国家音楽教授資格取得
FM愛知パーソナリティ。